

国 東 の 仮 面

— 鬼会面以外の仮面について —

衛 藤 賢 史

はじめに

昭和54年度より、別府大学付属博物館は、調査研究活動の一つとして「国東半島の仮面」の調査をはじめた。

その手初めとして、国東半島の天台宗系寺院で古くから行なわれている「修正鬼会」とよばれる行事に使用される仮面を調査対象仮面に選んだ。昭和55年度までの2年間にわたって、19ヶ寺94面を調査していったが、この調査の過程で、3ヶ寺に鬼会面以外の仮面も保有していることがわかった。

具体的にのべると、長安寺に「神楽面」が6面、瑠璃光寺に「蘭陵王面」1面、富貴寺に「菩薩面」1面の計8面である。

勿論、これからの調査で、まだ、かなりの種類・数の仮面が見つけれられると思うが、本小論では、一応、中間発表的な私論として、この鬼会面以外の8面についての調査結果をのべていくことにする。

なお、調査方法は、「鬼会面」と同様の測定方法で行なった。

(1) 神楽面六面

この面を保有する寺院は、長安寺である。豊後高田市加礼川635にあり、六郷満山の中山分本寺に属し、中世期を通じて六郷満山65ヶ寺の惣持寺の位置にあった。

当寺の保有する仮面は、他に鬼会面6面がある。

本論で述べる神楽面は6面あり、面種が分からないのもあるので、便宜上〔I〕～〔VI〕に分類し、以下述べていく。

神 楽 面 〔I〕

面裏に「オモイカ」とカタカナで面種を墨書している。

この面は、最大面長23cm、最大面幅14.8cm、面高一額部8.4cm・鼻部10cm・顎部5cm、彫厚1.5cm、重量400gの大きさを有する面である。

面の表情は、女性を思わせる柔和な作りである。

この面を部分的にみていくと、髪が額部中央より左右相称形に分けられ、この面にシンメトリックな印象を与える。眉部は彫りこまず墨で三ヶ月状に描いており、眼部も三ヶ月状に似た杏仁形の彫りに、丸形の削り貫きを施している。また、眼部の上部は、細い山型の彫りこみをして二重瞼を表現している。鼻部は、あまり高く彫っておらず、側面からみると鼻先が面全体のなかで、やや盛りあがって見えるぐらいである。口部は阿形で、歯を見せており、唇部に赤の彩色、歯に黒の彩色をしており、歯の黒は、お歯黒を塗っている感じを与える。

全体的にみると、細おもてでかすかに微笑をうかべているような、上品な作りである。

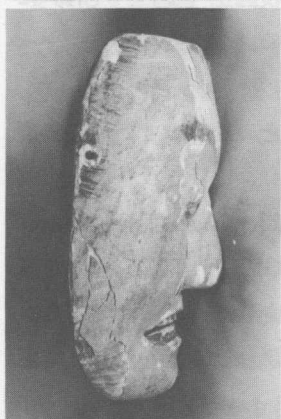
なお、面裏に「宇佐北崎左門」の墨銘をもつ。

神 楽 面 〔II〕

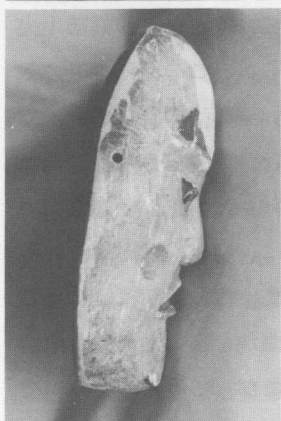
面裏に「コヤ子」とカタカナで面種を墨書している。



長安寺神楽面 A



長安寺神楽面 B



長安寺神楽面 C



長安寺神楽面 D

この面は、最大面長21cm、最大面幅16.4cm、面高一額部8cm・鼻部10.2cm・顎部6cm、彫厚1.4cm、重量400gの大きさを有する面である。

面の表情は、端正な男性を思わせる作りである。

この面を部分的にみていくと、眉部は墨で上方へつりあげたように描いており、男性的な風貌を強調している。眼部は、杏仁形のつりあがった眼の感じに彫っており、丸形の削り貫きをしている。また、眼部の上方に細い山型の彫りこみをして二重瞼を表現している。鼻部は、鼻筋のとおった形のいい作りである。口部は阿形であり、唇部を赤で、歯を黒で彩色している。

全体的に、横広の作りであり、正面からみて、左額部、両頬部、顎部などは木肌がみえる程、彩色がはげ落ちており、痛みがひどい。

なお、面裏に「宇佐北崎左門」の墨銘をもつ。

神楽面〔Ⅲ〕

面裏に「素○鳴面」と面種を墨書している。この面は、最大面長21cm、最大面幅16cm、面高一額部6.3cm・鼻部7.7cm・顎部5.7cm、彫厚1.8cm、重量300gの大きさを有する面である。

面の表情は、多少眉根をよせ、唇を^ニへの字、にまげた怒りの表現を思わせる作りである。

この面を部分的にみていくと、眉部は上方にむかって太く墨で描かれており、眉根をよせた彫りにしている。眼部は、眼尻をつりあげた杏仁形の作りであり、丸形の削り貫きをしている。鼻部は、鼻筋がとおっており、小鼻を小さく作り、側面からみて、あまり高く盛りあげていない。口部は^ニへの字、状の彫りをしており、阿形で、唇部に赤の彩色をしている。顎部の先端には、小さく点状に穴をあけ、髭を差し込んでいる。また、両頬部には、丸く赤の彩色

をしている。

全体的に、中央部に顔の造作を寄せた作りになっており、一種異様な風貌である。

なお、面裏には「文化7年、奉奇進手既春且、都○末田○津正藤原義信、大^ニ金吾作」の墨銘をもつ。

神楽面〔Ⅳ〕

面裏に「ホコ」とカタカナで面種を墨書している。

この面は、最大面長22.5cm、最大面幅17.5cm、面高一額部9cm・鼻部10.2cm・顎部7.1cm、彫厚1.7cm、重量500g、の大きさを有する面である。

面の表情は、翁を思わせる作りである。

この面を部分的にみていくと、頭部と額部との接点に、左右7個ずつ丸形の小さな盛りあげを作り、髪の毛を植えつけた跡をもつ。額部には、4本の太い筋を彫りこみ、額のしわを表現している。眉部は、眉根の部分を大きく上方に巻きあげ、細く長く左右の面横までのびた彫りである。眼部は大きく彫り、三ヶ月状の作りで、丸形の削り貫きをしている。また、眼部の上方に、細い山型の彫りこみをして二重瞼を表現している。鼻部は、鼻筋も太く、小鼻も比較的大きな作りであるが、側面からみた場合、鼻の盛りあげは、あまり高くない。口部は、阿形であり、唇部に赤の彩色をしている。また、左右の小鼻の部分から口部を巻くように、深い3本の筋を彫りこんで口元のしわを表現している。顎部は、口部の下の部分と、顎の先端に額部と同様の丸形の小さな盛りあげを作り、その周辺を黒で彩色し、髭を表現している。耳部は、彫りこみで写実的な作りであり、耳の上部を赤で彩色している。

全体的にみると、顔の造作を各部とも大きくとり、眼部・口部の彫りこみも深く、ゆったり

とした感じの上品な作りである。

なお、面裏に「宇佐北崎左門」の墨書をもつ。

神楽面〔V〕

面裏に、保有寺院による「テヂカラオー」の面種の説明書がある。

この面は、最大面長 23.5cm、最大面幅 18.4cm、面高一額部 6.5cm・鼻部 10.3cm・顎部 8.9cm、重量 550g の大きさを有する面である。

面の表情は、吽形の仁王像を思わせる作りである。

この面を部分的にみていくと、眉部は、眼部から額部にかけて上方に「く」の字、形に大きく彫り、眉根を寄せた作りになっている。眼部は、正面からみると丸形であるが、側面からみると眼尻まで彫っているのが分かる。この眼部には銅板が張られている。鼻部は、鼻筋に 2 本の横筋を彫り、小鼻を大きく横に広げている。口部は吽形で、真一文字に口を結んでいる。また、側面からみると、顎部を口部よりも盛りあげた作りにしており、小鼻から両頬にかけて深い彫りこみをしている。耳部は彫りこみ形で、写実的である。

全体的に、下ぶくれの造作の大きな作りであり、面全体をうすい赤で彩色し、眉部・口部のまわり・顎部を黒で彩色した怪異な風貌である。

なお、面裏に「宇佐北崎左門」の墨書をもつ。

神楽面〔VI〕

面裏には、保有寺院による「神楽面」だけの説明書があり、面種は不明である。

この面は、最大面長 26.5cm、最大面幅 18.3cm、面高一額部 9.6cm・鼻部 10.5cm・顎部 8.5cm、彫厚 1.7cm、重量 600g の大きさを有する面である。

面の表情は、阿形の仁王像を思わせる作りである。

この面を部分的にみていくと、眉部は、太く極端につりあがった深い彫りこみをしている。眼部は丸形であるが、正面からみると眉部に 3 分の 1 ほど隠されているので、眼をつりあげたような印象をうける。また、眼部には銅板を張っており、金色の彩色をしている。鼻部は、鼻筋がみじかく、眉根に深い彫りこみをしており、小鼻は大きく横に張っている。口部は阿形で、左右両端の上下に、合計 4 本の牙を有する。顎部は、口部よりも盛りあげた作りであり、小鼻から口部にかけて深い彫りこみをして、カツと口を開いた形相を強調している。耳部は、彫りこみ形である。

全体的に、忿怒形の造作の大きな作りで、全体に濃い赤の彩色をしており、眼部と歯に金色の彩色をした立派な作りの面である。

なお、面裏に「宇佐北崎」の墨書銘をもつ。

(2) 蘭陵王面

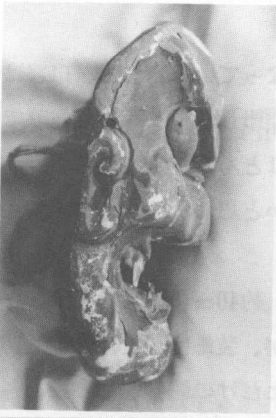
この面を保有する寺院は、瑠璃光寺である。東国東郡安岐町大字糸永 1339 にあり、六郷満山の末山分末寺に属する。

当寺の保有仮面は、他に鬼会面 6 面を有する。

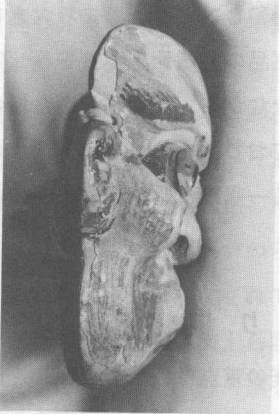
この蘭陵王面は、当寺が、このように呼称しているが、傷みの状態がひどいので正確には判断しがたい。しかし、本小論では、一応この呼称にしたがって呼ぶことにし、以下、調査の結果を記していきたい。

この面は、最大面長 23.8cm（顎部が欠損しており、残存部のみの測定になる）、最大面幅 24.1cm、面高一鼻部 13.4cm、彫厚 2cm、重量 400g の大きさを有する面である。

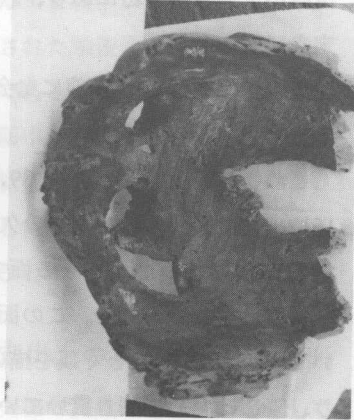
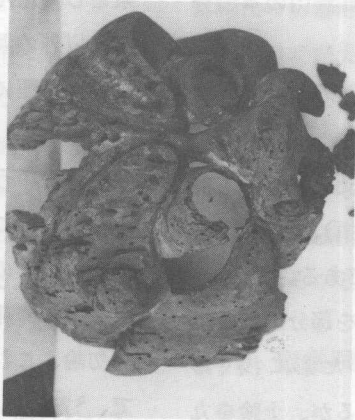
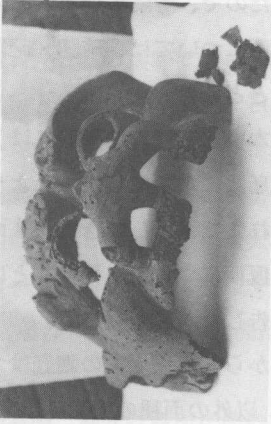
材質は桐である。顎部・頭頂部は欠損してい



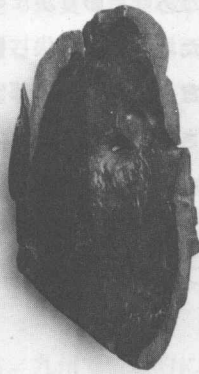
長安寺神樂面 E



長安寺神樂面 F



瑠璃光寺
蘭陵王面 G



富貴寺菩薩面 H

るので、頭頂部につけられた竜冠の有無などは分からないが、冠をつける跡ではないかと思われる。深さ1.5cmほどの小穴が額部にある。また、右眼部上方には、眉毛を差しこんだ跡と思われる小穴が7つあり、そのうちの2つの小穴に眉毛と思われる繊維がつまっているのが確認できる。

彩色は、眼部周辺にわずかに残っており、赤・黒・白の3色が分かる。

全体的に、額部・眉部・眼部・鼻部が、ある程度完全な形で残っているだけであり、面の詳細は分からない。また、虫の食った跡と思われる小穴が無数にあいており、面種を確認するのはむづかしい。

(3) 菩薩面

この面を保有する寺院は、富貴寺である。豊後高田市大字路字坊にあり、六郷満山の本山分末寺に属する。

当寺の保有仮面は、他に鬼会面2面を有する。

この菩薩面は、最大面長39.5cm、最大面幅15.2cm（正面からみて左半分欠損）、彫厚2cm、重量200gの大きさを有する面である。

材質は桐と思われる。この面を部分的にみていくと、眉部は大きく弧を描いた形に浅く彫り、眼部は丸形に削り貫いているが、上睨を丸く盛りあげた彫りかたをしているので、正面からみた場合、少し伏し目がちの印象を与える作りになっている。鼻部は、鼻筋を細くし、小鼻を小さく表現しているため、すっきりとした上

品な表情になっている。また、口部は卍形で、唇部を小さく彫り、固く結んだ作りである。

彩色は、ほとんど残っておらず、わずかに冠部に下塗りかと思われる白色が確認されるだけである。

全体的に、約40cmの面長をもつ、かなり大きな面であるが、装飾はほとんどなく、頭上に冠をいただいただけの簡素な作りで、各部のバランスもよく調和しており、あまり大きさを感じさせない、気品のある仕上がりをみせている。

ただ、残念ながら、正面からみた場合、左半分が欠損しており、また、右の冠部から頬部・額部にかけて一直線に割れ目があるのが惜しまれる。

おわりに

今回の調査の重点は、鬼会面を最初の対象として選んだので、寺院に保有されている、それ以外の仮面については、確認・記録・撮影という範囲にとどめた。

そのため、本小論では、結果的には1面ずつの紹介という形式になってしまったようだ。

しかし、これまで確認してきた、8面の鬼会面以外の仮面について、面種ごとに出来る限り詳しく報告したつもりである。

勿論、これからも「仮面」の調査はつづくので、鬼会面以外の面種の仮面の数も、以後、さらに増していくことになる。

今後、本小論で発表した仮面を加えて、面種ごとの、より詳細な系統的分類の研究をすすめていきたい。